



TITLE:

[12月25日 総括] 「世界のベランダ」
としてのアチェ

AUTHOR(S):

西, 芳実

CITATION:

西, 芳実. [12月25日 総括] 「世界のベランダ」としてのアチェ. CIAS discussion paper No.25: 災害遺産と創造的復興: 地域情報学の知見を活用して 2012, 25: 179-180

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228468>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

総括

「世界のベランダ」としての アチェ

西芳実 京都大学地域研究統合情報センター



私は日本から来ましたが、1997年から2000年の3年間、アチェに住んでいました。ですから、ここではアチェの人々の仲間の一人として、アチェのこれからあるべき姿について語ることをお許しください。

■ 多様な知識や情報が交換され わかりやすく翻訳される場だったアチェ

アチェはかつて、「スランビ・メッカ」すなわち「メッカのベランダ」と呼ばれていました。アラブ世界の知識や経験がウラマーと呼ばれるイスラム教指導者たちによってアチェに持ち込まれ、アチェでマレー語に翻訳されることで、東南アジア各地にイスラム教が広まりました。アチェが交易で発展する中で、アラブ世界の知見だけでなく、中華世界、ヨーロッパ世界、インド世界からさまざまな学問や知識がアチェに集まり、地元の人々が理解できる言葉づかいに翻訳されたのです。Arab(アラブ)、Cina(中華)、Eropah(ヨーロッパ)、Hindia(インド)の頭文字をとってこの地をAceh(アチェ)と呼んだというお話もあるほどです。

この地は、多様な背景を持つ知識や情報が交換される場であり、また、知識や学問が人々によりわかりやすい形に翻訳される場だったのです。アチェが発展したのは、金やコショウや液化天然ガスといった天然資源が豊富だったからばかりではありません。この地に

来れば、それぞれの人にとって使いやすい形になった知識や情報を手に入れることができたためです。

知識や情報の担い手は時代によって移り変わります。かつてはウラマーが情報を伝えていました。日本占領期の後、オランダによる再植民地化に抵抗したインドネシア独立戦争期には、森の中にラジオ局がつくられ、ラジオ放送を通じてインドネシア独立の意思を発信し、人々にさまざまな情報を伝えました。

また、同じく独立戦争期には、インドネシア共和国最初の国有機で、アチェの人々の寄付によって購入されたスラワ 1号(後のガルダ 1号機)がインドネシア共和国の指導者を乗せて海外にインドネシアの状況を伝えました。その模型は今でも「世界の国にありがとう」公園におかれています。

■ アチェの情報を世界に伝えるために 必要な三つの力

アチェの情報は、アチェの人々が自分の家のスランビにただ座っているだけでは人々に活用されません。情報が世界に伝えられるためには、求められる三つの力があります。

一つ目は、世界の知識や情報を十分に理解する力です。二つ目は、知識や情報を自分の必要に応じて翻訳し、使いこなす力です。三つ目は、自分の必要に応じて翻訳し、使いこなすなかで得られた新しい知見を、ほかの地域の人にもわかるように発信する力です。そのためには、アチェの人々が持つ「地域の知」を、世界の人々が理解できるように自分たちで改めて翻訳することが必要です。

今日、ワークショップにご参加のみなさんは、このような力を身につけ、発揮する自信があるでしょうか。

■ 情報・経験を共有し、わかりやすく変えて 発信する方法が問われた5日間

さて、このワークショップは、JST-JICA地球規模課題国際協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」の成果をもとに、「災害遺産と創造的復興—



資料30-1 「世界の国々にありがとう」公園の飛行機

「地域情報学の知見を活用して」というテーマで5日間にわたって行われました。今日はその最終日です。

ワークショップでは、アチェの経験と世界の経験をつなぎあわせ、新しい道を切り開く方法を考えてきました。あるいは、アチェと日本の被災や復興の経験をどのようにして共有し、それをどのように世界に発信するかを考えてきました。

とりわけ焦点となったのは、情報を共有し、わかりやすい形にかえて発信する方法です。そのためのメディアとして注目されたのはインターネットです。インターネットの技術に、情報学の知見と地域研究の知見を用いることで、私たちは「災害と社会 情報マッピングシステム」を開発してきました。また、ワークショップで紹介された「津波モバイル博物館」も、アチェと世界の経験をつなぐためのメディアとして開発されたものです。

■ 二度とアチェを紛争地にしないために 一人ひとりが努力を

バンダアチェ市には「世界の国にありがとう」公園があります。多くの犠牲者を出したブランパダン広場につくられました。ジョギングコースの周りにアチェを支援した世界の国々の舟型の碑が設置されています。その碑には、世界の国々の名前とともに、それぞれの国の言葉で「感謝」と「平和」の言葉が記されています。アチェの人々の感謝の念と、平和の決意が示されたものです。

世界は、これらの「感謝」と「平和」の言葉を受け取りました。次は、アチェがさまざまな知識や情報を発信するときです。今日この場に参加したみなさんには、それぞれ担っている役割や責任があると思います。今日ご参加のみなさんの多くは学校の先生です。先生は知識や情報の担い手であり、人々の関心を引くように工夫しながら知識や情報を伝えるのが仕事です。みなさんは知識や情報の担い手になる用意がありますか。

どれだけ素晴らしい知識や情報があり、それが人々に役立つ形になっていても、その場所が紛争地である限り、人々はその土地を訪れません。世界の人々は、アチェが再び紛争地にならないようにアチェの人々が努めているかどうかを常に見守っています。アチェの人々は、再び紛争が起こらないように努めなければなりません。

さきほどのムナスリさんの発表でも、プレート間に小さなゆがみが生じ、それがたまって爆発するときには大きな地震になるというお話がありました。紛争も同じです。小さなわだかまりが積み重なり、小さな紛争が積み重なることで大きな紛争になります。大きな紛争になってしまったら解決するのは困難ですが、大きな紛争になる前に、小さな紛争のうちであれば、私たち一人ひとりが工夫や努力をすることで解決できるかもしれません。

ともに世界に対する知識や情報の発信者となり、紛争を起こさない社会を作るため力をあわせましょう。